
北国戦隊、はがねのつばさ

緋炎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

北国戦隊、はがねのつばさ

【Nコード】

N9623A

【作者名】

緋炎

【あらすじ】

今回はちよつと気楽なサイカノを書いてみようと思います。

ごめんなさいと彼女は

あの日…空襲のあった日…僕たちの平穏は終わった。

あの日僕は、彼女にデートをドタキャンされ、幼なじみのアツシとアケミを誘って買い物に来ていた。

そこに突然…

空飛ぶ円盤が攻めて来たんだ。

「何だあれ…」

「UFOだ！」

「宇宙人の襲来だあ！」

逃げまどう人々、僕はアツシ達とはぐれ、人波に揉まれて、足をくじいて…

「…置いてかれた（泣）」

今に至る。

さっきから空中で、小さな飛行機が円盤を落としているが…気のせ

いか、僕に向かって落ちてくる気がする。

「ヤバいんじゃないのこれってー!!」

逃げないと…でも足が動かない。

僕は覚悟を決めて、落下してくるUFOを見据えた。

オオオオオオン!!!!

ドウオン!!!!

あと数秒で僕に直撃するっていう所で、小さな飛行機がUFOを吹き飛ばした。

「…」

僕は地面に降り立った、小さな飛行機を見つめる。土煙が薄れ、小さな飛行機に見えた物が何かはつきりした。

「ち…せ…」

それは僕の彼女のちせだった…背中につばさを生やし、右腕がマシンガンの…

「ごめん、シュウちゃん…私…最終兵器になっちゃった…」

僕は足を引きづり、ちせの元へ歩く…つばさとマシンガンを引っ込めた彼女を、僕は抱きしめる。

抱きしめた彼女の心臓は…

ドク…ドク…ドク…

しっかり動いていた。

「…あれ？」

僕は彼女の眼を見つめる。

「? シュウちゃん、どうしたの?」

「心臓…動いてる…」

「そんなの当たり前っしょや…生きてんだから…」

「え…いや、最終兵器に改造されて、心臓は止まってるし、血も出ないとかじゃ…」

ちせがキョトンとしている。

「やだ…そんな怖い事、されるわけ無いっしょや…」

「でも最終兵器って…」

ちせが携帯電話を取り出す。

「この携帯電話でね? 変身して宇宙人と戦うんだよ!」

ちせの目が輝く。

「悪い宇宙人と戦って、地球を救う…正義のヒーロー、北国戦隊! はがねのつばさ!」

ポーズをとって、決まった！と、満足そうに笑うちせを見て、僕は言葉が出なかった。

「あ！そうだ、忘れてた…」

ちせはポシエットから赤い携帯電話を取り出し、僕に渡す。ちなみに、ちせのはピンク。

「はい！シュウちゃん分！」

「…」

「これでシュウちゃんも、はがねのつばさの一員だね！」

「…え？」

うれしそうに笑うちせ。

「あ、ちなみにシュウちゃんはレッドだから、リーダーだよ？」
「…」

つまり、ピンクのちせは実質ヒロインって事か？

「よろしくね！リーダー！」

ポーズをとるチセを見て僕はため息をついた。

続く

二人の個人レッスン

その後、僕は自衛隊に連れていかれ、はがねのつばさについての説明を受けた。

地球防衛の要だとか、はるか昔に滅びた文明のロストテクノロジーがどうか、いまいち理解できなかった。

「まあ簡単に言えば、その携帯はロストテクノロジーを復元した試作品で、魔法を使えるようになる機械って事：で、君達には魔法で宇宙人と戦ってほしいわけ：OK？」

OKなわけ無い：そもそもなんでちせを選んだんだ？誰でもよかったんじゃないのか？

「それは違います。ちせさんは魔法文明の生き残りだから選ばれたんです、断じて適当に選んだわけではありません。」

信用できる話じゃないが：実際に翼を生やしたちせを見てる僕は、信じるしかなかった。

翌日、宇宙人襲来のニュースは世界中に報道された。

「宇宙人だって：何言ってるんだか良い大人が：」

母ちゃんが呆れ顔でニュースを聞いている。

「母ちゃん、昨日オレ、宇宙人に襲われたんだけど…」

「あ、そうだったわねえ…でもかすり傷で良かったわあ…」

「ん、じゃあ行ってくるよ。」

僕はちせとの待ち合わせ場所に向かう。いつもはちせが先に来ているのに、今日は来ていない。

プルルルルル…

携帯が鳴る

「はい？」

（あ、シュウちゃん？おはよ）

「おはよ…どうした？」

（ごめんなさい！今、青森なの…）

「はあ！？何言ってる…」

（宇宙人が来たって、夜中にメールが来たの！もう！シュウちゃん電源切ってたっしょや！）

「え？…あゝ…悪い！」

（もう…だから、学校には飛んで行くから…）

「わかった、じゃあ学校でな？」

（うん、後でね？）

携帯の通話ボタンを押した瞬間

ヒュオオン！！

何かが上空を通過した音がした。

「…ちせ?」

僕は一人、地獄坂を登る。

「…」

教室に着くと、ちせが机に突っ伏して息を切らしていた。

「シュ、シュウちゃ…ゼエ…お、おは…」

「あゝ、良いつて、無理すんな…お疲れ。」

「…ゼエ、ゼエ…」

微笑むちせ。かなり辛そうだ。

「少し寝ろよ、夜中って…あんまり寝てないだろ?」

「うん…」

ちせは再び机に突っ伏す。

昼休み、ちせと屋上でランチタイムだ。

「シュウちゃん、電源切っちゃ駄目だよ?」

「わかってるよ、朝から何回言われてっと思ってるんだ?」

フルーツ・オレをチュゴゴと飲みほし、僕はちせに向き合う。

「で、話って？」

3限目の休み時間、昼休みに話があるとかせは言った。今さら愛の告白は無いだろう…となると、予想出来るのは…

「あ、うん…魔法の使い方の説明を…」

やっぱりか…

僕はポケットから折りたたみ式の携帯を取り出し、画面を開く。

「…で？呪文かなんかあるんか？」

魔法と言えば呪文か魔法陣だろうと僕は思っていたから、きっとそうだろうと思ってちせに聞いてみたが…

「ううん、無いよ？」

…魔法陣も？

「無いよ？シュウちゃん、マンガの読みすぎだよ…」

お前がそれを言うか…

まあいい、とりあえずその…魔法の使い方ってやつを聞かせてくれ。

「簡単だよ、携帯をポケットに入れて、頭で考えるだけで…」

ちせは握った右手を僕に差し出し、その手を開くと花が飛び出した。

「ね？」

いや、ね？って…マジックレベルじゃねえか…

「…」

僕は右手を握り、開いた。

ボアア！！

「熱ッ！！」

僕の手から火柱が上がった。

「キャ！み、み、水水水！」

ちせが両目を閉じて両腕を僕に向ける。

ドバアア！！

僕の真上から大量の水が降ってきた。

「ちせ…」

ちせは目を開けてビックリ！突然彼氏がびしょ濡れになってたんだ、そりゃあなまらビックリするわなあ

「ご、ごめんなさい！いい、今乾かすから！」
ヒュォ！バギャン！！

さて、ここで問題です。ヒュォ！って音はちせが僕を乾かすために出した温風です、では最後のバギャン！！は？

「…え？」

気がつくと僕は…屋上の柵をぶち壊し、中に浮いていた。

バギャン！！の正体は、柵をぶち壊した音でした…ちせ、加減ってものをしてほしかった…

「うわあああ！！！」

どうする？このままじゃ僕は…

「シュウちゃーーーーーん！！！」

ちせは僕に手を伸ばし、僕の名前を叫ぶ。

ああちせ…その手を掴むには、オレには腕が50mぐらい足りないよ…

「ちせ…」

僕はちせに手を伸ばしてみた…

ガッ！

「キャ！」

気が付くと、僕はちせを押し倒していた。

「…ちせ？」

「シュウちゃん、今の…」

テレポート？

ガコン！！

「痛ッ！」

頭に鈍い痛みがはしる。

「シュウジ！あんたちせに何してんのよ！」

アケミだ…

「あんた…あんたってやつは…！！」

ガン！ゴス！…

僕は…これからやっていけるんだろうか…

続く！

出撃する彼氏

帰り道、僕はちせと並んで歩く。

「シュウちゃん、大丈夫？」

ちせが心配そうに僕を見上げる。

「…大丈夫」

ではなかった。アケミにボコボコにされ、顔はアザだらけ…見るも無惨とはこのことだ。

「…シュウちゃん、ちょっとこっち来て？」

「え…」

ちせが僕を路地裏へ引っ張って行く

「ちせ？」

「シュウちゃん…目、閉じて…」

僕は言われるがままに眼を閉じた。

ちせが僕の両頬き手を添える。

…これはもしかして？若い男女が狭い路地裏ですることをしようとしているんじゃない？

まさか…ちせに限ってそんな…いや、でも最近ちせ、テンション高

かったから…勢いで…

僕がそんなことを考えているうちに、ちせの手が頬から離れた。僕は目を開けた。

「？」

「シュウちゃん、顔…まだ痛い？」

ちせが心配そうに僕を見上げる。

「…?! 痛くねえ…」

僕は自分の顔を触ってみた。腫れていた箇所が凹んで…つまり、怪我が完全に治癒していた。

「魔法で治してくれたのか…ありがとな、ちせ」

ホッとしたのか、ちせは胸をなでおろして言った。

「良かったあ…昼休みは加減できなかったから、ちゃんと治るかわからなくて…」

治癒を加減できなかった場合…どうなるんだ？まさか、顔が吹っ飛んだりほしないだろうな…怖くなってきた。

「ま…まあ、治ったんだしもう良いべや！さあ、路地裏から出るべ！」

「うん…」

僕らは同時に同じ方向に動いた…ちなみにこの路地裏は、人が一人づつしか通れないぐらいの狭さで、僕らは壁に背を向け、互いに向かい合っていた。

つまり…

「シュウちゃん…」

「ああ…」

はまった…

「ど！どうしよ！動けないよお！！」

「くっそ…ふん！」

「痛い！痛いよシュウちゃん！」

「ああ…悪い…とりあえず落ち着いて…」

僕らはお互いに見つめ合う…胸の鼓動が速い…

＼シュウジside＼

…こんな時に僕は何を考えて…！！

…いや、でもさっきの治癒の時におあづけくらって…違う！あれは僕が勝手に妄想してただけで…

…でも

＼ちせside＼

どうしよお…なんか変な気分になって…

はう！私ったらこんな時に…

あゝもゝゝ！私のバカア！そんな事、今考える事じゃないっしよや！
…でも

ちよつとぐらい…

良いよね？

良いだろ？

「ちせ…」

「シュウちゃん…」

そう、それは

川を流れる木の葉のように

自然な流れで

二人の唇が今

重な…

ピリリリリリ！ピリリリリリ！ピリリリリリ！

「うお！」

「ひゃ！」

ゴン！×2

携帯の着信音に驚き、
僕らは顔を離し、
互いに頭をぶつけた。

「痛ッ…ちせ、大丈夫か？」

「う…ん、大丈夫…」

ちせの顔が真っ赤だ…きっと僕も真っ赤だろう…はんかくせえ…

「メール…自衛隊からだ！」

ちせが携帯を開く。僕も携帯を開いてみた。
メールの内容はこうだ。

~~~~~はがねのつばさ召集♪

東京に異星人襲来（笑）

レッドならびにピンク、至急（5分以内ね？）東京へ向かい、異星人を討伐せよ（^| ^）／~~~~~

友達に送るメールか！？

♪とか（笑）とか：

しかも5分以内って：

「…動けないっつの！」

すまない、東京の人々…君たちの犠牲は無駄には…

「シュウちゃん！テレポート！」

ちせが叫ぶ。テレポート？いったい何を…

…あ

僕の頭の中にちせを押し倒した映像が…違う！もうちょい前だ！

映像が巻き戻る。

僕が空中から一瞬でちせのもとへ飛んだ映像が流れる。

なるほど…確かにテレポートを使えば5分と言わず数秒で行ける。

でも…

「…東京まで？」

正直、自信は無い。

「シュウちゃんファイト！」

ちせが激励の言葉をかけてくれた。

「…はあ…」

僕は宇宙人と戦う覚悟を決めた。

「ちせ、しっかり捕まってる？」

「うん！」

ちせが僕の体にしがみつく

「よし、行くぞ？」

「うん！」





ちせが震えながら僕にしがみつく。

「うわ！アホ！揺らすな！落ちるだろ！」

思わず僕もテンパる…

正確に言おう、

僕とちせは、

路地裏から

東京タワーの

てっぺんに

テレポートしてきた。

下を見れば地獄が見える…上を見ればUFOがいっぱい…  
僕は思わず本音を口に出した。

「…帰りてえ」

涙まで出てきそうだ。

「シュウちゃん…」

ちせが涙目で僕を見上げる。

「ちせ？」

「私、行ってくる。」

ちせが光につつまれ、ちせに銀色の翼が生える。

「シュウちゃんは、ここで待ってて？」

「ちせ？ちょっと待…」

ちせは飛んで行ってしまった。

僕は一人残された。

僕は何をしに来たんだ？彼女の見送りか？

覚悟を決めたんじゃないかったのか？

ちせ、確かに僕は帰りたいたった…でもな？ちせを置いて一人で帰るなんて…

「出来るわけないべやあー!!」

僕がそう叫ぶと同時に、ポケットの中の携帯が緋く光出し、僕の背

中に緋色の翼が生えた。

僕はちせの飛んで行った方向を睨み

緋色の翼を羽ばたかせ

東京タワーのてっぺんから

飛び立った。

続く！

## Red with Pink

私は一人、銀色の翼で空を飛び、マシンガンで次々にUFOを落としていく。

「…」

私は泣いてます。いつからだろう…最初にUFOを墜落させた時は、ゲームをしているような気持ちだった。

でも…宇宙人だって生きてる、私は…命を奪ってるんだって考えたら…涙が出てきちゃった。

でも…私がやらないと、大切な人達が宇宙人に殺されちゃうから…

私がい慢すればそれで…

本当はね？耐えられないと思って、シュウちゃんも巻き込んだの…シュウちゃんなら、私の事…叱ってくれると思うって。

でも…やっぱり駄目だよね？私は選ばれたけど…シュウちゃんは関係無いもん…

さあ、急がないとシュウちゃんが待ちくたびれちゃう！

私はUFOの間をぐり抜け、町のすぐ上を飛んでいるUFOに狙いを定めた。

「…」

涙が止まらない。

私はマシンガンを乱射した。

でも…

「！」

私は目を疑った…狙いを定めたUFOが、一瞬で消えてしまった。

「レポート…それともホログラム？」

私は辺りを見回した。

「…囲まれちゃった」

数十基のUFOから放たれたミサイルが、私に向かって飛んで来る。

「よけられないや…」

ごめんね、シュウちゃん…私、もうシュウちゃんに会えな…

ヒュン！

ドゴン！ズドドオ！

ちせがいた所が炎に包まれ、爆音が響く。

「…え、私…なんで？」

自分が無事で、しかもお姫様だっこされている事に驚き、上を見上げてさらに驚くちせ。

目線の先にあったのは、無愛想な…ちせの愛する人の顔だった。

「シュウちゃん!？」

「おう、危なかったなあ…まさに危機一髪だったべ？」

僕はちせに笑いかけた。けどちせは悲しそうな顔をして…さらに泣きながら…

「…なんで来たのさ！」

僕を怒鳴った。

「待っててって言ったべさ！なんでついて来たの！？」

僕は思いっきり息を吸い込み、たった二文字の言葉を言い放った。

「アホ！！」

ちせが僕の腕の中でビクつく。

「なんでだど？彼女が戦ってるのに、彼氏が指をくわえて待ってるわけにはいかねえべや！！」

ちせは脅えた子猫のように縮こまる。

「そんなにオレが信用出来ないか？そんなにオレは頼りないか！」

「そんなことないよ！」

ちせは僕の腕から降り、自分で空中に浮かぶ。

「シュウちゃんは信用してるよ！でも…巻き込むわけには…」

「だから…それをアホだって言ってるんだ！」

僕は腕を組み胸を張って言った。

「オレはお前の彼氏だ！オレはちせの力になりたいんだよ！巻き込むとかどうか、それこそ関係無え！」

ちせが啞然としている。

「良いか？オレはちせと戦う、携帯返せって言っても絶対に返さないから！」

僕はちせを抱きしめる。



「一人で抱え込むなよ…もっとオレを頼れや。」

「…うん…ごめんなさい…」

僕にしがみつき、泣き続けるちせ。

「ちせ、早くあいつら倒して、帰ろうぜ？」

「…うん！」

ちせが頷いた瞬間、ちせの銀色の翼が桃色に変わった。

「ちせ、オレに作戦がある。」

僕はちせの耳元で作戦を囁く。

「…ええ!!」

ちせは信じられないと言うような眼で僕を見ている。

「大丈夫、オレを信じろ！」

僕はちせに手を差し出す。

「…うん！」

しぶっていたが、ちせは僕の手を握り返してくれた。

僕の考えた作戦は、至って単純な物だった。

「二人で最高速度のままUFOに突っ込んで、全部のUFOを貫く！」

まさに単純だろう。

僕とちせは緋と桃の光の線を残してUFOに突っ込む。

一基二基と貫いていき、10分ぐらい経過した時点で全てのUFOを貫いていた。

「よし、ちせ、仕上げだ」  
「はい！」

仕上げ：つまり、UFOを人のいない所へ落とす作業だ。

「シュウちゃん、大丈夫なの？」

「なんとかなるべや：じゃ、やるべ！」

僕は頭の中でこう思い浮かべた。

今、僕らが貫いたUFOを全て、東京湾海上に

一瞬のうちにUFOが消え、東京湾方面から爆発音が聞こえた。

「これで良し：」

「やったねシュウちゃん！」

ちせが抱きついてくる。

「疲れた：」

僕は疲労が限界に達し、ちせに抱きつかれたまま寝てしまった。

眼が覚めると、僕は自宅のベッドの上にいた。

時刻は0時、このまま朝まで寝ようと思った時、携帯のランプが点滅しているのに気付いた。

「メール…ちせからか」

~~~~~シウちゃんこんばんは(≡▽≡)ッ

今日のご苦労様でした！

あと、本当にありがとう…

今度から、もっとシウちゃんに頼りたいと思います(笑)

じゃあ、また明日！

おやすみなさい

~~~~~

メールに画像を張り付けてあった。

「あ…あいつ…」

張り付けられていたのは、僕の寝顔だった。

続く（笑）

## 魔法の形

僕の初任務から一夜明けた朝、僕は起床と同時に違和感を覚えた。

「…やべ…体が動かねえ」

首から下が全く動かない…寝返りもうてない状態だ。

「…今、何時だ？」

時計を見ると7時30分…いつもなら家を出る時間だ。

「…今日は欠席だな」

僕は諦めて寝てしまおうと目を閉じた。

「ちょっとシユウちゃん？学校に遅刻するわよ？」

ノックもせずに母ちゃんが部屋に入ってきた。

「母ちゃんオレ…今日は学校休むわ」

「どしたの？具合でも悪いの？」

「筋肉痛…かな？首から下が動かなくてよ…」

「だらしないねえ高校生が！部活引退してから、なまってんじやないの？」

その通りだろう…

「とにかく！今日は休むから」

「わかったわよ、大人しく寝てなさい？」

だから…動けないって言ってるべや！

母ちゃんはすぐに部屋から出ていった。僕は今度こそ寝ようと目を閉じた…が、

「あ！やっべ…ちせ、忘れてた！」

ちせに学校休むって伝えねえと…携帯携た…動けないから取れねえし…

「参ったな…どうするべ」

僕は携帯を見ながらため息をついた。

ちせ…

声には出さず、頭の中でちせを呼んでみた。

(…シュウちゃん?)

僕の中に、ちせの声が響いた。

(ちせ? 何でちせの声が…)

(シュウちゃん? どこにいるの?)

(あゝ…ベッドの中)

(え! 家? 遅刻しちゃうよ!?)

(仕方ねえべや…首から下が動かねえんだから)

(あ、昨日頑張ったからかな?)

(多分な…つくわけで、今日は学校休むよ)

(ええ! シュウちゃん休むの!?)

(だって動けねえし…)

(ちょっと待ってて!)

(いや、待ってて…)

それ以降、ちせの声は聞こえなくなった。



テレパシー…ポケットじゃなくても、近くに携帯があれば使えるんか？

僕が一つ知識をたくわえた時、玄関のチャイムが鳴った。

どたばたと廊下を走る音が聞こえる。

「シュウちゃん！」

ちせがノックもせず部屋に入ってきた。

「ちせ？早かった…」

な…と、僕が言う前に、ちせは僕から掛布団をひっぺがし（寒！）、僕の上に馬乗りになった。

「ちょ！ち、ちせ！？」

声が裏返る…ちょっと積極的過ぎるぞちせ？

ちせは僕の胸に両手を乗せ、動かなくなる。

「？」

ちせの手から僕の体に、温かさが染み渡る感覚…

不意にその感覚が途絶えた。

「シュウちゃん、どう？」

ちせは僕の上から降り、ベッドの横に立っている。

「…お、動く…」

どうやらちせが治癒してくれたようだ。

「ありがとな、ち…せ…！」

僕の目に時計の針が飛び込んできた。時刻は…

「あと5分で遅刻！」

僕は急いでパジャマを脱ぎ、制服に着替えようとした。

「キャ！」

「え？」

ちせが顔を真っ赤にして僕を見ている。ちなみに僕はパンツ一丁…

「うわ！ごめ…」

僕が謝るより前に、ちせは部屋から出ていった。

着替えを終え、部屋から出るときに見た時計は7時58分を指していた。

あと2分…

僕は部屋の前にいたちせの手を引っ張り、玄関へ向かった。

「いってきます！」

「おじゃまりました！」

玄関のドアが閉まる。

「あ！シュウちゃんお弁当…」

母ちゃんが玄関のドアを開けるが、右を見ても左を見ても、僕は居なかった。

「…セーフだな」

僕は教室の端にいる。僕はとっさにテレポートを使い、教室の端に着地した。目撃者は…奇跡的にも居なかった。

「おはようちせ、ついでにシュウジも」

アケミが教室に入って来た。

「おはようアケミ」

「おはよ…ついでかよ…」

「シュウジ、何か疲れてない？」

「疲れてねえ…」

「ふうん…あ、そういえばちせ！あんたさっき地獄坂逆走してたでしょ！よく間に合ったわねえ…」

「え？あ、う…うん！へへへ…」

ちせの顔がひくつく。

「…ところで、あんたら何で外履きのままなのさ…上履きは？」

僕の顔もひくついた。

## 1 限目、英語

(シュウちゃんシュウちゃん！)

(なんだよ、授業中に…)

(3行目の和訳って、「あなたは彼を信じていますか？」で良いのかな？次、私が当たりそうなの…)

(テレパシーでカンニングかよ…違いよ、「あなたは彼を信じていましたか？」だよ。過去形になってるべ？)

(あ、本当だ…ありがとシュウちゃん！あと…邪魔してごめんね？)  
(良いって、気にすんな)

## 2 限目、日本史小テスト

(えっと…日露戦争があったのは…)

(1904年だよ)

(…)

「魔法使ってカンニングって、ありがたみが無いって言うか…」

「悪用？」

「だよなあ…」

昼休みの屋上、僕とちせは緊急作戦会議と題して集合した。

「やっぱり、世のため人のために使うべきじゃないか？」

「そんな事言われても…宇宙人と戦う時以外に人のために使う事なんてないっしょや…」

ごもつとも…

「なら…極力使わないようにしよう、別に生活に困るわけじゃないし」

「うん…」

しぶしぶ納得するちせ。オレだって魔法使いたいさ、でも魔法に浸かっちゃいけないんだ…墮落しちゃダメだ！

とか言いつつ、僕はちせにバレないように、家に忘れた弁当を魔法で取ってきた。

続く

## 日記 (1)

シュウちゃんこんばんは (へーへ)

英語の時間は和訳を教えてくれてありがとう！

おかげで先生に怒られなくてすんだよお (T^T)

シュウちゃんの言う通り、魔法はあんまり使わない方が良いよね…  
慣れって怖いからね！

でも知ってるよ？シュウちゃん、昼休みに魔法で弁当取ってきたで  
しょ！ (<Д>) ちゃんとわかるんだからね？) ^o^ (

そろそろ中間テストだね…

あのね？シュウちゃん、もしよかったら…

あの…ごめんね？

その…今度、一緒に…

図書館で、勉強しませんか？

あの…ごめんね？私ね？日本史なら…少しは教えてあげられると思  
うんだわ…

他の教科はダメだけど…

よかったら、今度の土曜日にでも…



あ、シュウちゃんの予定も聞かないと…あ！宇宙人が来たら…

その…今度、機会があつたらお願いします…

じゃあまた明日！

おやすみなさい、  
シュウちゃん…

(^・^)(Chu♪  
(\*^^\*)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9623a/>

---

北国戦隊、はがねのつばさ

2010年10月12日18時32分発行